

言 頭 卷

いのちはかなし、いのち尊し

学 長 水 谷 幸 正

今夏は格別に暑かった。それは積年の人類の懊悩のつみ重ねによる重圧なのだろうか。

戦後四十年ということもあって、平和への願いを込めた運動が盛りあがっていた。人類の福祉のためには、まずなんといっても世界が平和でなければなるまい。いろいろ問題はあっても、幸いなことに日本はこの四十年間、戦禍にみまわれることはなかった。しかし、アラブやイランをはじめ世界のあちこちにおいて戦争が生じている。平和を唱へその運動を展開したからといってすぐに世界が平和になるわけでもない。各地における争いをみるにつけて、なにか人間の業としか言いようのないむなしさを感じる。どうすれば恒久の平和を築くことができるであろうか。一人ひとりの人間の心のありようによってしか解決できないのではないかと思う。平和の原点は個々の人びとの心中にある、ということである。宗教心のめざすところもそこにあると言つてよい。

このようなことをあれこれ思いめぐらせているときに、五百人以上のいのちを瞬時にして奪い去った航空機墜落のニュースが入る。まさに悲惨の一語につきる。本学の前途有為な学生も含まれていた。そのほか本学と何らかのつながりのある有縁の人もいたことであろう。まずはとりあえず冥福を祈念するばかりであった。

いのちを奪う、これは戦争だけのことではない。平時においても、たとえば、炭坑爆発、交通事故、殺人事件など、毎日毎日多くの人びとのいのちが失われている。まさに「いのちはかなし」と嘆かざるをえない。「人生五十年、けてんのうちに比ぶれば、夢まぼろしの如くなり」という幸若の謡を聞くまでもなく、かりに天寿を全うしたとしても、僅か五十年ないし百年、夢まぼろしの如くはかないものである。まして況んや、人災や天災によって突如としてのいのちを失うにいたっては、やりきれないむなしさを感じる。はかないいのちであっても、天寿を全うできる世の中になってほしい。そのためにこそ、戦争はもちろんのこと、人災をくいとめねばなるまい。

そこでさらに大事なことは、はかないいのちであればこそ、いのちが尊いということである。生命の愛惜ということとは人間の本能的なことであるが、それが必らずしも生命の尊重につながるわけではない。それには人間としての理性のはたらきが必要である。仏教の本質はこのいのちの尊さを自覚することにある、と言ってもよい。もちろん、いちがいに「いのち」といってもその内容はさまざまで奥深いものであり、尊いということについても、人間中心でよいのかどうか、というような問題もあるが、生命の尊重をぬきにして仏教を語ることはできない。相手への思いやりの心、ともに痛みを分かちあう心などを内容とする、いわゆる慈悲心の根源はこの「いのち尊し」にある。『法句経』に説く「人として生を受けること難し、やがて死すべきもの、いまいのちあるは有難し」ということを心の奥底にどっしりと受けとめるところから、平和への願いが具現してくるはずである。

有名な「無常迅速 生死事大」の仏語は、いのちはかなし（無常迅速）いのち尊し（生死事大）を味わい深く教示してくれる。